シリーズ 先生（十六）

―私が出会った先生―

新卒の彼女が新潟で踏み出した一歩は…

野村紀子

「あなたにとって師と仰ぐ、思い出に残る先生は？」と問われることはよくありますが、残念ながらそのような私の人生を決定的に左右した「先生」を挙げることは難しいです。どの先生方もその方それぞれに信念をもって教育に携わっていただろうと、今は思うのです。

日本の教育現場の特徴は、個々の教員が同僚性を発揮して教育活動を行っていることはよく知られていることで、私の中学時代のどの先生方も個性的で、思い出に残る方々ばかりでした。中には、反面教師（失礼！）と言えるような方もいらっしゃいましたが・・・。「だからあなたは中学教師になったのですか？」と問われれば、確かにそうかもしれないと答えることはできますが。

高校時代の先生方は、ただただ専門的な知見に富んだ方々でした。残念ながら保守的な風土の進学校でしたから、生き方を左右されたという思い出はほとんどなく、だから大学は東京へ行かなければと、私でも入れそうな学部・学科を選んで、運よく文科省のお膝元にある教育系大学に入ることができました。しかし大学の授業は指導要領の解説を説くような内容が多くて、最終的には大学外へ学びの場を求める事となりました。都会では自分で学びを求めさえすれば、期待する出会いが得られるという環境があり、もがきながらも今の

立ち位置を見つけられたのは、そこで出会った多くの方々の影響が大きかったと思います。その出会いは「群像」のようでもあり、私も含めて一人に限定されるものでもないと感じます。

これまでの人生で出会った一人の教師・・・。そこでもう一度過去に戻って、農村部に生まれた私の小学校時代――新発田市立佐々木小学校1年生の私の担任、鈴木ヤエ先生の思い出を記すことにします。

鈴木先生はその春大学を卒業し、新卒で私たちの担任になりました。学年は80人足らずの2学級で、1クラス37、8人くらいの学級でした。彼女はいつもスーツを着て教室にやってきて、毎朝ワーワーうるさくしている私たちに対して朝から厳しく接していたように思います。私の当時の1学期末の通知表の所見には、「運動会の練習で転んでも最後まで歯を喰いしばって走っていました」と、割とよくありそうな文章が書かれていました。

夏休みは自由研究が宿題に出されましが、何をやればいいのか困りました。私は持ち帰った朝顔をただ毎日観察して「あさがお日記」にまとめました。毎日、「葉っぱが何枚、つぼみが何個、花はいくつ咲いているのか」を観察しただけのものでしたが、何と、市内の自由研究発表会に選ばれました。

その研究発表の際に、あさがおの蔓の巻き方がどちらの方向に撒いているのかを先生は指導してくださいましたが、私はそんなことには全く気付いてもいない事でした。私の何の変哲もない観察日記が選ばれたことで、私はただ地道にコツコツと観察するだけでも、成果が出るのだということを学びました。

当時の鈴木先生の授業をほとんど覚えていませんが、頭から離れない思い出の授業が一つあります。

3学期のある日、鈴木先生は黒板にいきなり「君が代」の歌詞を書き、この内容をみんなで考えるというのです。

先生　「君が代の君って誰のことでしょう？」
児童　「あなたでなくて、天皇ですよね？」
先生　「そうです。『千代に八千代に』ってのは、『ずーと、永遠に』っていう意味ですよ。」
児童　「ふーん・・・。」
先生　「その次の、『さざれ石のいわおとなりて』っ

て、どういう事だと思いますか?」
児童　「小さい石が大きな石になるってことですか?」
先生　「山にある大きな岩が川に流されると、石はどうなりますか?」
児童　「流されると・・、大きな石は流されて小さくなります」
先生　「この歌詞は逆ですね。流されると大きくなるって言っているので。」
私　(ふーん、この歌は逆の事を言っているか・・つまりこれは嘘の歌詞なんだ・・)
先生　「天皇の代が苔のむすまで、ずーっと続くっていう意味なのです」

私はこの歌が主権在民に反しているということではなくて、小さな石が大きな岩になるというのは自然の摂理に反しているという歌なのだということを理解しました。しかし今思えば、鈴木先生は私たちに「君が代は明らかに間違っている歌詞なんだよ」と教えたかったのではないでしょうか。なぜなら、こんな授業を小学校1年生に対して行う先生っていないのではないでしょうか。実際、その後の小学校生活で「君が代」の授業をした先生の記憶はありません。

また、鈴木先生は学級を班に分けた班活動を行いました。班の名前を自由に子どもたちに名付けさせて、私の班の名前は「グズラ」という、当時はやっていたアニメの主人公の名前を取り、私はみんなにその班の班長として選ばれました。しかしその班でどんな活動をしたのかは全く覚えていないのですが・・・。

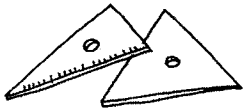
そんな楽しい小学校1年生もあっという間に終わりに近くなったころ、私たちは鈴木先生がこの年をもって教員を辞め兵庫県宝塚市に行くこと、春には結婚して姓が「大路」に代わることを知ることになりました。

最後の学級活動の時間、鈴木先生は手作りの賞状を一人一人に手渡してくださいました。そこにはこの1年間、一人一人が頑張ったことを称える内容が書いてありました。(私は自分がどんな賞状をもらったかを全く覚えていないのですが。)私たちのクラスにはいつも自分の席には座らず、ハナ水を垂らして授業中もずーっと教室をうろうろしている純ちゃん(男子)がいました。先生は純ちゃんにも「ずーっと毎日教室中を歩き回って頑張っていたで賞」をくださいました。

今となって思うことは、一年で新潟の教員を辞め、他県へ行ってしまった鈴木先生はどんな気持ちで私たちとの一年間を過ごしたのかということです。教員になって新しく出会う子どもたちに胸を弾ませ、私たちと出会い、成長しようとした1年間。運動会の練習に追われ忙しい毎日を過ごし、夏休みの自由研究に目を通し、地味な朝顔の観察をとにかく発表できるまでに、おそらくは他の先生に聞きながら指導した日々。

毎朝騒々しくしている私たちに対し、班づくりの手法を学び模索して試してみた2学期。おそらく1年で新潟の教員を辞めようと決意したのちの卒業式前の「君が代」の授業。やっている内容はとてもたどたどしいものであったはずですが、しかし、精一杯の事を私たちに伝えようとしたのではないかと思います。そして不思議と幼馴染と小学校の思い出を語る時、鈴木先生の印象は私たちの共通の思い出となっているのです。

なぜ鈴木先生はそんなに私たちの心に残っているのでしょうか。あり来たりですが、小学校1年生の最初の担任は、その後の人生への影響力がとても強いということでしょうか?でも何だかそれだけではないような気もします。彼女は誠実に私たちに向き合おうとしていて、そして「他の先生とは違った」のです。新潟県で他の先生とは違う、自分のやり方を追求していこうとしたことは、とても大変だったと思います。

その後、私は中学校の教員になったのですが、鈴木先生のような教師になりたいと思ったからではありません。でも今頃になって鈴木先生を思い出し、「先生、新潟での新卒の一年はどんな1年間でしたか?」と聞いてみたいのです。「なぜ先生は一年で新潟から去り、そのあとはどんな人生を歩んだのですか?」と。

（のむら　のりこ・新潟市立小合中学校）